

「現代美術センターCCA」主催のワークショップを伝える記事  
(2015年9月27日 毎日新聞・抜粋)

戦後日本を代表する建築家、村野藤吾（1891～1984）の設計で知られる北九州市八幡東区尾倉の八幡市民会館の存続問題が注目されている。老朽化した市立八幡病院の移転・新築に伴い、今年度末での閉館が決まり、建物解体の可能性があるためだ。同じ村野の設計で、隣接する市立八幡図書

館については、市はすでに解体撤去の方針を打ち出し、準備を進める。建築家や構造エンジニアらを集め、市内で開かれた建築ワークショップでは、建物の価値や日常風景を守る重要性を指摘し、二つの建物の保存活用を求める声が相次いだ。

【長谷川容子、写真も】

（本文の前半略）倉方氏は「八幡時代がなければ建築家・村野藤吾もなかった。北九州市は作品を通じて、それをもっとアピールするべきでは」と話す。

建築史家で東北大学院の五十嵐太郎教授は、市民会館の建設時期に着目する。「1950年代は戦後の日本が復興していく中で公共施設ができて、一番市民が喜んだ時代」とし、八幡図書館も含めた一帯の作品が「日常風景の重要な構成要素となっている」と指摘。一例として、撤去後に市民の喪失感を訴える声が増し、十分の一のスケールのミニチュア版が建設された福島県内の無線塔を紹介した。

公共施設の大規模削減計画策定に取り組み北九州市は「今後40年間で保有量を少なくとも20%削減」する数値目標を掲げ、見直しを進める。市民会館と図書館については老朽化の問題もあり、改修費も存

建築史家で大阪市立大学院准教授の

続のネックになっているようだ。

スペイン・サラゴサ万博のパピリオン・ブリッジ（ザハ・ハジド）などの構造設計を手がけた東京芸大の金田充弘准教授は、市民会館、図書館を視察した印象として「技術的なことを考えると残すのはそれほど難しくない。市民会館はホールとしてもかなり健全で、今のままで使っても何の問題はない。用途変更や増床を含む改築をする場合は、現在の法や基準に照らし合わせて補強が必要だろう」との見解を示した。

市は八幡市民会館の閉館後の取り扱いについて、まちづくり団体などの意見を参考に、12月末に結論を出すとしている。大阪市立大の宮本佳明教授は「このような建物を残していくのは建築界全体の問題。活用できるような力を合わせたい」と述べ、締めくくった。

- ★八幡市民会館の取り扱いは、2017年3月末まで結論が延期となって、4月13日にリボン委が提出した第2次案の可否が、6月中に示されます。
- ★建築は時代の生き証人です。建築を残すことで歴史や時代背景を後世に伝えることができます。八幡市民会館は誇りある大切な施設です。
- ★八幡市民会館に平和資料館や常設の美術や音楽の講座などを開設すれば、賑わいを取り戻し活性化できるのではないのでしょうか。！

八幡市民会館は

国際学術組織・ドコモモジャパンから、「保存すべき近現代建造物」に選定されています。（2014年度の選定）

~~~~~

★ドコモモジャパンが「八幡市民会館の保存活用を求める要望書」を、北九州市に提出した。…(中略)…要望書は市民会館について、デザインに優れ、現存する村野作品として高い価値があり、戦後復興の象徴としてつくられた経緯などから、市にとって重要だと指摘。「解体は日本の建築文化にとって大きな損失」と訴え、耐震性を改善して活用するよう求めた。…(後略)

【奥村智司】(2017年2月9日 朝日新聞・抜粋)

「八幡市民会館の活用を求める連絡会」の目的

- (1)八幡市民会館を、文化庁の「近現代建造物緊急重点調査の対象物件」および、「登録有形文化財」に申請するよう、北九州市に求めます。
- (2)八幡市民会館に必要な修理・補修をおこない、現状を活かして活用することを、北九州市に求めます。